

また、中小酒造が都市部へ進出した際に、都市部にある個人経営の酒販店が大きな役割を果たしたことが明らかになった。規制緩和のため、資本を持たない小さな酒販店は、中小酒造と同様に大手の同業者に圧倒される厳しい立場にある。今回取材した酒販店では、グローバル化に対抗する手段として、大手ができない細やかなサービスと独自の品揃えに特化する道を選んだ。

中小酒造でも、消費者とより近い関係を築ける、また、情報の透明性が高い関係を維持できるとして、お互いの利害が一致したのである。この組み

合わせにより、酒造と酒販店と消費者の新たな関係性が誕生した。それは、「顔が見える」関係であり、これは一種のトレーサビリティであるといえる。

中小酒造と酒販店のタッグが先頭をきっていた今回のブームは、今落ち着きを見せ始めている。事実、本研究で現在進行形の現象を把握できたとは思えない。ブームの凋落がどこまで進むか実際にはわからない状態である。なので、今後もブームの行方を本稿の続きとして追及していきたい。

## 日本アニメ研究

### 「ジャパニメーション」に描かれた社会空間の変遷—

鎌野 幹子

本論文では、日本アニメの中に描かれた社会空間の変遷について述べる。

最初に、今日「ジャパニメーション」として世界から称賛を受けるまでに成長した日本アニメが、もともとは日本でどの様にして生まれ、どのようにして発展してきたのかを、大正時代にまでさかのぼりその歴史を追う。初期は米国の技術を研究してどうにか真似ることだけで精一杯であった日本アニメだが、追いつけない部分は、日本独特の世界観や、複雑でおもしろみのあるストーリー、また器用の操作する撮影技術で補うなど、様々な工夫を凝らしながら、独自の方法で良質のアニメ制作を目指すうちに、最終的には世界に誇れる優れた文化へと大きな成長を遂げたのである。

日本においてテレビアニメの放映が開始されたのは1963年。続いては、その年から、長期間放映されたアニメのみをピックアップし、約10年

ごとに一つの年代作品としてまとめるという作業をする。そしてその個々の作品において、登場人物、内容、空間という三つの項目を書き出し、どういったタイプの作品であるのかを明らかにしていく。その上で、それぞれの年代において作品の内容にどのような特徴があり、また登場人物、内容、空間というアニメの中の社会空間がどのような形で描かれているのか、またそれぞれの時代においてアニメが描き出そうとしているものは何か、訴えようとしていることは何であるのかという点に焦点をあてて分析を進めていく。

手塚治虫の「鉄腕アトム」から始まり、GAINAXの「新世紀エヴァンゲリオン」で締めくくられる社会空間分析。それぞれのアニメが描かれた時代背景、また作者の意図とそれがどのように結びついているのであろうか。1980年代生まれの私が持つアニメ感を通して考えて行く。

## 千葉県の上野毛に見る市民活動の力

佐光 幸代

多様化、複雑化してきている今日の社会において、NPOが活躍する場はますます増えてきている。NPOと言っても、活動分野は多岐に渡っており一概には言えないが、本論文では特に「政治や自治体、圧倒的な力をもつ大企業などが進

める規定路線や公共事業に異議を申し立てる運動」として、上野毛埋立計画をめぐる市民活動を取り上げ、NPOとしての可能性を考察した。対象地域は、千葉縣市川市、船橋市地先に広がる埋め残された海域、上野毛（干潟や浅海域）で

ある。調査対象とするNPOは、数ある市民団体の中でも、行政をも巻き込んだ大きなイベントを開催させるなどの実績をもつ特定非営利活動法人三番瀬環境市民センター（NPO三番瀬）を取り上げた。実際に活動に加わりながら会員の方々にお話を伺ったり、三番瀬へ足を運んだり、また、地元行政の方にもお話を伺いながら調査を進めていった結果、以下の点が明らかになった。NPO三番瀬は、三番瀬埋立計画に対して「反対」ではなくカウンタープランを提示する方法で

活動してきたのだが、そのことが行政との協働関係を築き上げていった。また、三番瀬の保全のことだけを考えていくのではなく、まちづくりまで含めた広い視野で三番瀬を捉えていた。特にこのような活動分野のNPOが力を発揮するには、行政との協働は欠かせない。決して協調路線というわけではなく、行政を見抜く目を確かに持ちながら、行政と市民団体とがお互いをうまく利用しあえたとき、その可能性はさらに広がっていく。

## 路上喫煙の現状と今後の課題 —千代田区を千代田区を事例に

佐藤 奈津子

昨今、TVCMや広告等で喫煙マナーの向上が謳われている。たばこは嗜好品であり、それを規制する理由はない。多くの人がマナーを守ってたばこを楽しんでいるのにも関わらず、一部のマナーの悪い喫煙者によって、周囲の人が迷惑を被ったり、吸殻が街に捨てられてしまったり、様々な問題が起こっている。特に路上喫煙は、周囲の人が、たばこの煙で具合が悪くなったり、火によって火傷を負ったりと大変な危険性を孕んでいる。

そういった喫煙者のマナーやモラルが問われている中、千代田区は2002年10月、路上喫煙を規制する罰則付きの条例を設け、喫煙者のマナー向上を目指した。

しかしその一方、健康・禁煙等が騒がれている昨今、飲食店やオフィス、駅のホームなどあらゆる場所が禁煙となり、喫煙者がたばこを吸う場所が少なくなってきたのも事実である。

このような状況の中で、たばこという個人の嗜好を制限してしまうのも、たばこによって周囲の人が不快な思いをするのもよくない。一体どうすれば、喫煙者と非喫煙者がお互い気持ちよく共存できるのだろうか。路上での喫煙に初めて罰則を科した千代田区を取り上げ、探った。調査方法は、

千代田区の実地調査を行うと同時に、2003年から路上での喫煙に罰則を科している品川区と比較した。千代田区の実地調査では、たくさんの人が歩く姿が見られたが、路上喫煙者が0～4人程度で、場所によっては、捨てられている吸殻も少なかった。

千代田区では、毎日抜き打ちで非常勤職員や区役所職員が交替でパトロールし、路上喫煙者には理由の如何に関わらず2000円の過料を科す。また、区では喫煙所を一切おかない置かない等、徹底した姿勢をとっているのに対し、品川区では、パトロールは業者に委託して決められた時間に行い、過料の1000円は悪質な場合にのみ科すことにしている。また、各所には区で設置した喫煙所が存在する。この両区の違いについても考察した。

また、千代田区において、喫煙者20人に「条例をどう思うか」、「どうすれば喫煙者と非喫煙者が共存できると思うか」の2つの質問を口頭で行った。条例に対しては、「概ね賛成である」や「仕方がない」といった意見、「喫煙者と非喫煙者の共存方法」に対しては、「分煙化する」や「相互理解が必要」といった意見が得られた。これらの結果をふまえ、両者の共存方法を考察した。